京都橘大学
地域連携センター

つながる Vol. 14

つながる

CONTENTS

京都モダニズム建築を訪ねて　第24回
帷子ノ辻駅ビル
河野 良平　本学現代ビジネス学部准教授

第11・12回橘セッション
「学まち AWARD」
作業療法学科
心理学科
歴史遺産学科
児童教育学科
経営学科
都市環境デザイン学科
看護学科
国際英語学科
理学療法学科
日本語日本文学科
救急救命学科
臨床検査学科

14

京都モダニズム建築を訪ねて　第24回＊

＊文化政策研究センター広報誌『News Letter』からの連載回数を引き継いでいる

帷子ノ辻駅ビル

河野 良平　Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

皆さんは嵐電（らんでん）をご存知だろうか。京都市の中心部から嵐山に向かうには嵐電が便利で、ちょっとレトロな感じの路面電車が街中を行き来している様子を見たことのある方も多いのではないだろうか。四条大宮を出発し、西院で阪急電車と、嵐電天神川で京都市営地下鉄と連絡し、終着駅が嵐山となる。嵐電は通称で「正式には京福電気鉄道嵐山線」という。京福電気鉄道株式会社の歴史は古く、前身に当たる京都電燈会社が日本で4番目の電灯会社として設立されたのが明治21年（1888）であった。京都の近代化における三大事業の一つである第二琵琶湖疏水の開削と、それに関連した蹴上発電所が明治23年に着工、同25年に京都市営水力発電所として完成し、これを機会に京都電燈は水力発電を利用するようになった。また、水力発電所の電力は、もう一つの三大事業である（道路の拡築に加えた）市電に供給されることになり、こちらは現在の京都市交通局へと至る。京都電燈も電鉄事業に乗り出し、大正6年（1917）既に開通していた嵐山電車軌道と合併、昭和17年（1942）に京福電気鉄道株式会社が発足した[1]。ちなみに、比叡山にある日本初のロープウェイ架設である叡山ケーブル・ロープウェイも京福電気鉄道の事業である。

さて、今回紹介する嵐電の「帷子ノ辻（かたびらのつじ）駅ビル」(1973)は、四条大宮から数えて8番目の駅の直上に建っている。周辺には東映太秦映画村や国宝・弥勒菩薩像を本尊とする広隆寺（いずれも最寄りは太秦広隆寺駅）があり、駅のすぐ南側には三条通りが走っている。北側方面に目を移すと、仁和寺、妙心寺や北野天満宮があり、こちらには嵐電の北野線が伸びている。先に書いてしまったが、嵐電の四条大宮と嵐山を結ぶ線は嵐山本線と呼ばれ、この帷子ノ辻駅で北野線と接続している。そのため、この駅は相対式と島式（駅ホームの形式は数種類ある）の複合という珍しい駅で、ホームが4番線まであり、嵐電の駅の中でもかなり大きい駅となっている。駅ビル建設のアイデアは「（前略）嵐山本線帷子ノ辻駅に隣接する空地と電車線路上の空間とを利用して新しい帷子ノ辻駅を建設、一部を駅施設として利用し、一部をスーパーマーケット（ジャスコ）に賃貸する、という案であった」と記述されている[2]。建設当時の建物規模は鉄筋コンクリート造、地下1階・地上4階建てで、延床面積は6415m²、設計は竹中工務店が担当している。現在はバリアフリー工事が行われたため、地上階に改札が設けられているが、建設当初は地下に改札口があり、各ホーム

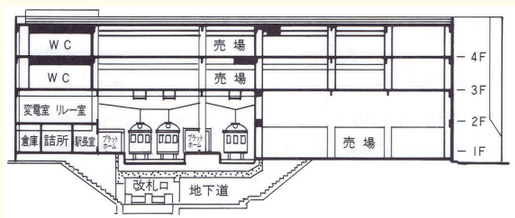

図1：断面図。地下に改札口があり、ピロティ部分がプラットフォームになっている様子がよくわかる。（出典：『京福電気鉄道50年の歩み』p.68）

写真1：竣工当時の東側外観。手前に見えるホームは北野線のもの。（出典：『京福電気鉄道50年の歩み』p.68）

ムには地下通路を経由してアクセスするよう計画されていた（図1）。現在も地下改札は現役で、通常は入口専用になっている。外観は駅の北側部分と駅直上部分の2つの直方体が組み合わさったような形状になっている（写真2）。東側から見ると、手前に建つ4階建ての縦長の直方体に、駅上に浮かんだ平べったい横長の直方体が合体したように見え、いかにもモダニズム的なデザインとなっている。ホームの大部分が駅ビルのピロティに覆われており、その下を電車がくぐり抜ける様子は、当時の人々の目に相当モダンに映ったものと想像される。平面的に見ると、1階北西角に店舗の入口が計画され、各階とも商業施設として機能している。1・2階は吹き抜けの大きなワンルームになっており、現在もスーパーマーケットが入居している。3・4階も店舗用の空間となっており、4階は壁のない水平に広がったユニバーサルなプランで、こちらも非常にモダニズム的デザインと言えるだろう。平面的にはシンプルな構成となっているが、上下をつなぐ動線である階段室がこの建築の内部空間最大の見所になっている（写真2）。入口近くにある建物のコーナー部分に大きな階段室が確保されていて、単に上り下りするだけでなく、ゆったりとした踊り場が利用者の交流スペースとしても機能するように設計されている。角部にスリット状に設けられた窓から明るい光が取り込まれ、斜め上から光が降り注ぐような印象を与えている。広々とした階段室は、買い物の合間に一息つく、移動と休憩の場所として提供されているのである。

嵐電には帷子ノ辻駅の他に、インテリアデザイナーの森田恭通によってデザインされた「嵐山駅」や、小ぢんまりとしたレトロな駅など個性豊かな駅が多数存在している。路面電車に揺られながら、のんびりとタウンスケープの移り変わりを眺めてみるのも京都の楽しみ方の一つと言えるだろう。街も建築も移動する近代的な視線によって、楽しむことができるのである。

写真2：階段室の内観。ゆったりとした踊り場が印象的。（筆者撮影）

参考文献

京福電気鉄道社史編さん事務局編『京福電気鉄道50年の歩み』1993

京福電鉄株式会社HP

[1] この辺りの内容は以下の記述をまとめた。京福電気鉄道社史編さん事務局編「創業史―京都電燈株式会社時代」及び「京福電気鉄道株式会社の発足」前掲書、pp.1～6、p.19

[2]「再建の道を求めて」前掲書、pp.67～68

第11回橘セッション

「学まちAWARD」

TACHIBANA SESSION REPORT

■各学科発表
①作業療法学科「～多世代交流サロン『くらしカフェ』での取り組み～」
　発表者：武田紗奈、押谷健斗（作業療法学科）
②心理学科「『しゅくだいかたづけ隊』参上！ 活動報告」
　発表者：林栄里香（心理学科）
③歴史遺産学科「地域・消防・所有者と歴史遺産学科による文化財防災訓練～４者連携による文化財の保護と継承～」
　発表者：寺田善照、長澤知真（歴史遺産学科）
④児童教育学科「地域の子どもたちとの音楽を通した交流～アウトリーチ活動の取り組み～」
　発表者：浅井美鷹、荒木望美、太田来実、門脇佑香、木下紘枝、澤菜々花、曽我部由愛、平茉奈実、武田真奈、
　　田中沙紀、田村真里絵、堤野乃、山下遥香、浅井沙彩
⑤経営学科「MOMOテラスと連携した地域活性化イベント PBLの取り組み」
　発表者：伊藤心（経営学科）、斧直輝（都市環境デザイン学科）
⑥都市環境デザイン学科「洛和会×こだわり市場」
　発表者：中島美優、福本弥生（都市環境デザイン学科）
⑦看護学科「醍醐中山団地　お助け隊」
　発表者：熊谷涼子、出原桃佳、夛田唯香、安東怜美、中井文彦（看護学科）

■司会進行：山岸達矢　本学現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科 准教授

本学では、各学部・学科が、それぞれの特性を活かした地域貢献・地域連携の活動に取り組んでいる。第11・12回橘セッションは、その取り組みを振り返り、そこで得られた知見や蓄積を全学で共有することを目的に、「学まち AWARD ～地域での『学び』の成果発表・交流会」の全２回シリーズ（第11回／10月31日、第12回／11月14日）として開催した。

各学科の発表に対しては、①学びの深さ、②取り組みの熱意、③地域への貢献度、④取り組みの新規性と発展性、⑤プレゼンテーションの巧みさ、の５項目に基づいて審査員と会場参加者が評価し、優れた発表には学長賞（1チーム）、副学長賞（2チーム）、プレゼンテーション賞（1チーム）が授与された。

※表彰結果は第12回橘セッションの末尾（15ページ）を参照。

発表を通して、すでに他の学部・学科の学生が参加・協力する事例が生まれていることも明らかになり、学部・学科を横断したさらなる連携の可能性と学びの深化を感じさせる場となった。

作業療法学科
「～多世代交流サロン『くらしカフェ』での取り組み～」

私たちは１回生前期科目の「地域課題研究」で、外部講師の片木孝治先生から、学生や高齢者を中心に地域の多様な年代の人が交流する「くらしカフェ」の取り組みを紹介され、参加してみました。カフェの企画は、上京区の出町枡形商店街の一角にある会議スペース「Deまち」に京都のいろいろな大学の学生が集まり、自分が関わっている分野の知識やアイデアを出し合って決めます。

カフェは、高齢者の自宅で行います。ふだんの生活空間だからこそ、さまざまな悩みや不安など、生活に根ざした話を聴くことができ、学生と高齢者という世代の違いを超えて相互理解を深めることができます。

カフェの会場を提供してくださった高齢者の方は、脳トレが趣味なので、学生が考えた脳トレ（たとえば文字を並び替えて意味のある単語をつくるゲームや、ひとりじゃんけんなど）をみんなで楽しむことにしました。

また、参加される高齢者の方々は認知症への関心が高いので、認知症予防の勉強会を企画し、講師は本学作業療法学科の先生に依頼しました。当日は勉強会の後、音楽に合わせて、認知症や転倒を予防する体操を楽しく行いました。

くらしカフェは、京都ソリデールにつなげるための学生と高齢者の出会いの場として活用されています。ソリデールは、独居高齢者宅の空き部屋に若者が安価な家賃で同居し、交流する取り組みで、京都府が推進する事業のひとつです。くらしカフェやソリデールの取り組みを通して、私たちは他大学・学部の仲間や地域の高齢者の方々からさまざまなことを学び、みずからの成長を実感することができました。（拍手）

心理学科
「しゅくだいをかたづけたいあなたと一緒に『しゅくだいかたづけ隊（たい）』参上！ 活動報告」

子どものメンタルヘルスに着目した、小中学生対象の学習支援の活動について報告します。私たちは、学齢期の自殺死者数は２学期が始まる９月１日が最多であることに注目し、夏休みの宿題を終わらせることで小中学生の気持ちを軽くし、新学期を控えた不安やSOSを発信する機会を提供することで、子どもたちがさわやかに新学期のスタートを切れるように支援することを目的に取り組みました。

活動は８月下旬の４日間、山科区内の２カ所で行い、看護学科・児童教育学科・心理学科の学生が参加しました。最初は初対面の子どもたちに緊張しましたが、時間の経過とともに楽しく活動できました。「塾の先生に聞いたほうが早い」と言われて、くやしい思いもしましたが、教える側はそれだけの深い知識が求められるのだと痛感する機会にもなりました。

宿題には調べもの学習や論文、読書感想文などもあったので、答えよりも考える道筋を教えることを重視しました。この点では、ふだんレポートを書く機会の多い私たちの知識を活かすことができたと思います。また、不安や要求を発信できる子どもばかりではないので、それぞれの個性や特性に合った対応や、わかりやすい言葉かけをこころがけました。

次の機会には、より多くの子どもたちに活動を知らせるために事前に小中学校で告知することが大切だと考え

SESSION REPORT TACHIBANA

ています。実施日も、夏休みの前半と後半に分けるなど工夫して、多様な子どものニーズに合わせた継続的な学習支援を行い、2学期が始まるタイミングで子どもたちのストレスを少しでも軽減できるようにしていきたいと思います。（拍手）

歴史遺産学科
「地域・消防・所有者と歴史遺産学科による文化財防災訓練　～4者連携による文化財の保護と継承～」

私たちの学科は、山科区の地域住民、山科消防署、区内の寺社など文化財所有者と連携して、継続的な文化財防災訓練に取り組んでいます。

古都・京都の神社仏閣の多くは、同時に文化財所有者でもあります。文化財を災害から守るには専門知識も人手も必要なことから、「学生諸君に手伝ってほしい」との要請を受け、歴代の学生が10年以上、防災訓練に参加してきました。寺社は学習の場を提供し、学生は当該文化財について現地で学び、文化財のレスキュー技術を習得し、それを文化財関係者にフィードバックするわけです。

訓練場所は、勧修寺・隨心院・毘沙門堂の3カ所を毎年、順番に回ります。今年の会場は勧修寺で、7月に行いました。まず模擬火災を発生させ、仏像の搬出と人命救助を行いつつ、消火器や放水で消火します。仏像搬出の際には、セーフティーカードを仏像の肩にかけ、搬出文化財を確認します。訓練を通じて、早期発見、早期救出、早期鎮火の大切さを胸に刻みました。

学科では、1回生で学んだ基礎を、2回生でさらに深めていきます。そのタイミングで防災訓練を行うことにより、学生は文化財を守ることの難しさや重要性に気づき、その学びを大学でより深めることにつながります。

数多くの文化遺産に恵まれている京都では、将来にわたって貴重な文化遺産を継承することが何よりの地域貢献になりますし、10年間の積み重ねで、私たち学生の参加は関係者のみなさんから期待されるようになりました。歴史遺産学科で学ぶ専門的な知識を活かし、若者の力でこの活動を持続できれば、さらなる地域貢献につながると思っています。（拍手）

児童教育学科
「地域の子どもたちとの音楽を通した交流　～アウトリーチ活動の取り組み～」

児童教育学科の佐野ゼミは、幼児コース11名、児童コース3名、計14名が所属し、毎年、アウトリーチ活動をしています。アウトリーチとは地域社会への奉仕活動や現場出張サービスのことで、私たちは日ごろ音楽に触れることの少ない地域の方々にもっと身近に音楽を感じてもらおうと、楽器演奏や歌を披露しています。今年度は7月に子ども園、12月に小学校で演奏しました。

幼児コースの学生は、小学校訪問によって保育所・幼稚園卒園後の子どもたちの姿を見ることができ、児童コースの学生は保育所・幼稚園を訪問することによって、就学前の子どもたちの環境を理解することができます。

演奏会の企画や内容は、学生が主体となって考え、七夕やクリスマスの季節にちなんだ曲を取り入れて、空き時間を利用しながら練習を重ねました。

アウトリーチの際は、ピアノの連弾やサックス二重奏なども行いますが、必ず1曲はトーンチャイムを用いて全員で演奏することにしています。トーンチャイムは、大きさの違うハンドベルで、一つひとつ違う音が出ます。特別な演奏能力は不要ですが、全員が一つになったとき初めて音楽が完成し、すてきなメロディを奏でます。ゼミには音楽が得意ではない学生もおり、全員が参加できるトーンチャイムを取り入れているのです。

子どもたちは、本物の楽器の音に耳をすませ、私たちと一緒に元気に歌い、こども園の園長先生からはお礼の手紙もいただきました。

佐野ゼミは、学園祭の児童教育学科の企画である「ちびっこランド」でも毎年、「りえちゃんのピアノ」を使用して音楽会を開いています。かつて2年続けて「ちびっこランド」に参加してくださった山本理恵ちゃんは、その年の暮れ、交通事故で短い命を閉じました。ご両親は歌が好きだった理恵ちゃんを偲び、ピアノを大学に寄付してくださったのです。私たちは、ご両親への感謝と理恵ちゃん追悼の気持ちをこめ、このピアノを使わせていただいて演奏し、ご両親も喜んで聴いてくださっています。

これらの活動を通して、幼児から児童への発達のつながりを実感することができ、編曲など音楽的な力とともに、トーンチャイムの演奏で人と協調する力も培うことができました。さらに練習計画や役割分担などの立案・企画を行うことで保育士・教員として必要な力も養えたという実感があります。ぜひ後輩たちに引き継いでいきたいと思っています。（拍手）

経営学科
「MOMOテラスと連携した地域活性化イベント　PBLの取り組み」

私たちの学科の先輩たちは、一昨年の「知財活用アイデア全国大会」に参加し、京都タワー周辺の商店街や結婚式場でのイベントのアイデアを発表しました。それを見た住商アーバン開発株式会社から、MOMOテラスで子どもたちが喜ぶイベントを考えてほしいとの要請があり、PBL（課題解決型学習）として取り組むことにしました。

児童教育学科の発表の様子

MOMOテラスは、伏見区桃山にある商業施設で、平日は高齢者を中心に約2万人、休日は家族連れを中心に約5万人の来場があります。今回は休日の家族連れをターゲットに、「MOMOテラスで鬼退治」という節分企画を2月3日に実施することにしました。MOMOテラスを荒らしに来た鬼をお豆マンが退治するというストーリーを組み立て、その鬼退治を子どもたちに手伝ってもらい、最後は鬼もお豆マンもみんなと仲良くなって一緒に記念撮影をし、思い出に残してもらおうという企画です。

準備は、劇のシナリオづくりから、音響やカメラ、鬼のパネル3体、子どもたちに配るお面100枚、豆菓子の用意など、多岐にわたりました。配布用のお面は、かわいらしい赤鬼・青鬼・緑鬼の顔ですが、一枚ずつ印刷・裁断・貼り付けをして、目の位置に穴を開けるのは大変な作業でした。毎晩9時まで研究室でその作業をしていると、だんだん周りの人も手伝ってくれるようになって、ようやく完成しました。

作戦会議は、ほぼ毎週、計25回開き、MOMOテラスとの打ち合わせも11月から2月にかけて3回行いました。本番の公演は2月3日の午前・午後の2回で、後日、反省会を開きました。「やりたいこと」と「できること」の間に差がありましたが、理想に近づけるための代替案を粘り強く考えることができたと思います。

劇の出演者は、子どもと関わるのが上手なことから児童教育学科の学生に依頼しました。子どもは、鬼が怖くて泣きだす子もいましたが、ほぼ楽しそうにはしゃぎ、最後は笑顔で記念撮影に臨みました。子どもの参加者数は想定の約5倍で、100枚用意したお面も途中で足りなくなって、驚きました。子どもたちは「お面がかわいい」「楽しかった」と口々に言い、親御さんは「子どもの写真を残すことができて、うれしい」と喜んでくださいました。

私たちは今回の活動で、ショッピングモールが抱えている課題や集客イベントの工夫を学び、MOMOテラスが地域と密接に関わっていることも知りました。また、モノや人のマネジメントのあり方、ビジネスの基準やマナー、顧客目線で考えることなどを実践的に学ぶことができましたし、他の学科と協力して活動できたことも大きな成果です。今後も私たちの取り組みが地域企業の目に止まり、声をかけてもらえるように頑張りたいと思います。（拍手）

都市環境デザイン学科
「洛和会×こだわり市場」

「こだわり市場」は、2013年から続く谷口ゼミの活動の一環で、「こだわりを持って商品を製造・販売している店をより多くの人に知ってほしい」との思いから、毎年1冊の冊子を制作しています。店選びから取材・執筆・レイアウトまですべて、ゼミの2・3回生が担当しています。

「こだわり市場」は、高齢者施設の洛和会ホームライフ音羽と連携して、高齢者向け京都観光ツアーを実施しました。山科区は高齢化率が高く、認知症患者も増えていて、今後も多様な分野で顧客対象に高齢者の占める割合が高まると予想されますが、若い世代は高齢者と関わる機会が減っています。そこで、若い世代が高齢者への理解を深め、関わり方を学ぶことと、高齢者と地域のつながりを強化することを目的に、洛和会からの提案を受けて、この観光ツアーを企画したのです。

実施日は3月18日の午後、参加者は現4回生9人、現3回生2人、谷口教授、洛和会を利用している高齢者8人、洛和会職員6人、計26人です。当日までに何度も学生と洛和会職員で打ち合わせを重ね、ルートの下見等もした上で、貸切バスで東山区の口金専門店まつひろ商店、甘春堂東店、豊国神社を観光しました。

高齢者のなかには車いすや杖を使用している方が何名もおられたので、転倒防止のために学生が腕を組んだり、職員のアドバイスのもと歩行のサポートを行いながら移動しました。バス内では、できるだけ楽しめるよう、自己紹介やクイズも行いました。

高齢者にはトイレの近い方もおられるので、トイレ休憩もプランに組み込みました。高齢者を対象にした企画ではトイレ問題が重要なポイントだということは、今回の企画で実感したことです。

参加された高齢者のなかには、歩行困難のため外出することに恐怖心があったけれどもツアーに参加するためにリハビリに励んだという方もおられました。また、学生はお年寄りと接することで高齢者への理解を深めることができました。したがって、この企画は、高齢者にとっては「生きがいの気づき」、学生にとっては「高齢社会を考えるきっかけ」になったのではないかと思います。

11月に予定している2回目のツアーについては、今回の反省をふまえ、行程案内のしおりを作成し、高齢者施設の職場体験もしました。今度も楽しいツアーにしたいと思っています。（拍手）

看護学科
「醍醐中山団地 お助け隊」

「お助け隊」は、醍醐中山団地のプライマリーファミリー（以下、PF）の家庭で対象者のニーズの解決に向けて活動するもので、PFは訪問活動や体力測定・健康教育を通して関わる山科区老人クラブの会員や醍醐中山団地等の地域住民を指します。

お助け隊の活動は、2017年12月の2回生の「プライマリケア実習Ⅰ」と2018年6月の3回生の「プライマリケア実習Ⅱ」という2回の授業のなかで行いました。活動の目的は、看護の対象となる人びとが生活している家庭の場を通して、置かれている環境を理解した上で健康課題をアセスメントし、根拠に基づいた看護援助を実践できる基礎的な能力を養うこと（「プライマリケア実習Ⅰ」）、PFとの関わりを通して、地域で暮らす人びとの健康課題に対する援助方法と看護職の役割を理解すること（「プライマリケア実習Ⅱ」）です。

事前学習として、伏見区と醍醐地域に関する概要をまとめた資料作成、マナー学習（清潔感・表情・声のトーン、靴の脱ぎ方、敷居のまたぎ方、座布団の座り方等）、掃除方法の学習（換気扇や浴室天井の掃除方法等）を行い、実習に備えました。実際に「お助け隊」が活動した内容は、換気扇掃除、網戸の張り替え、窓ふき等で、作業中や作業後には対象家庭の方とさまざまなコミュニケーションを行いました。

2回生の実習では、生活背景を知ることやあらゆる視点から対象をとらえることの大切さを学び、依頼内容を聴くことで対象者が抱える問題の本質や原因を理解することができました。3回生の実習では、身体的・精神的・社会的問題の影響や疾患と生活上の問題をより深く

考えること、健康的に暮らすために必要な社会資源を知ることで、より対象者に合った看護に結びつくことを学びました。また、人によって抱えている問題が異なることを実感し、その人が必要としている支援につなげる大切さを学びました。

病院実習をするようになった今、お助け隊の経験によって、疾患を中心に対象者をとらえるのではなく、その人の価値観や生活を理解し、それを尊重しながら看護をする必要性を理解できたことがとても役立っています。（拍手）

（了）

TACHIBANA SESSION REPORT

第12回橘セッション

「学まちAWARD」

■各学科発表
①**国際英語学科**「“ Unexplored Kyoto Yamashina ”」
発表者：大川紗英子（英語コミュニケーション学科）
②**理学療法学科**「いきいき幸齢教室―醍醐中山団地―」
発表者：長野壮馬（理学療法学科　学生団体 CRC プロジェクト代表）
③**日本語日本文学科**「筆を持てば天下一品」
発表者：足立咲己、新田潤（日本語日本文学科書道コース）
④**救急救命学科**「地域の絆・消防団―多世代（20代～ 60代）の心意気―」
発表者：岡篤志、米田拓斗（救急救命学科）
⑤**臨床検査学科**「臨床検査を支える京都発の世界技術」
発表者：寺尾友伽、由布美友（臨床検査学科）

■司会進行：安彦鉄平　本学健康科学部 理学療法学科 准教授

国際英語学科
「“ Unexplored Kyoto Yamashina ”」

“ Unexplored Kyoto Yamashina ”は、まだ知られていない山科の魅力を海外の人びとに伝えたいとの思いで作成した英語版山科ガイドです。国際英語学科の留学しない学生のための Community Translation Program（CTP）というプログラムは、1 回生で「多文化理解プログラム講座Ⅱ」という翻訳入門授業を受け、2 回生になると「多文化理解プログラム演習」という授業でレストランのメニューや寺社紹介パンフレットの翻訳を体験し、3 回生の「グローバルビジネスⅡ」というフィールドワーク中心の実践演習のなかで、山科の人びととコミュニケーションを取りながら英語版山科ガイドを作り上げます。

ガイドを作成する目的は、CTP に参加した学生が、外国人観光客のニーズを調べ、山科の食・観光・交通・イベント・買い物など各分野に関する実践的な翻訳練習をすることにありますが、観光客が山科を訪れれば経済効果も見込まれますので、地元の人にも役立ちます。

ガイドには、観修寺や隨心院、毘沙門堂などの観光名所、和牛・焼肉・鍋料理・麺類・甘味処など食の楽しみ、お土産におすすめのご朱印帳の紹介などを載せましたが、日本語版山科ガイドをそのまま翻訳するのではなく、外国人に読みやすくなるよう写真やイラストを増やし、印刷以外はすべて学生が担当しました。

今後は、“ Unexplored Kyoto Yamashina ”の part 2 を作成するとともに、part 1 と 2 のホームページを立ち上げて、国内外の人びとのインターネットアクセスを可能にしたいと思っています。さらに、現代ビジネス学

SESSION REPORT TACHIBANA

部の学生が作成した『山科ウォーキングマップ』を英語に翻訳・出版することと、山科の飲食店には英語版メニューを用意したお店が少ないので、お店が独自にメニューを組み立てられるよう、英語メニューのデータベースも作りたいと考えています。

近年、インバウンドの増加によってリアルな学びが可能になりました。翻訳は、海外の人の立場で考えるのが最も大切で、留学しない学生にも実践的に深く考える機会となります。自文化に対する歴史認識や知識を深めることで、翻訳の質も高まりますし、逆に自文化や多文化を知らなければ翻訳はできません。私たちは、翻訳を通じて、山科区民や山科のコミュニティと外国人の架け橋のような存在になりたいと考えています。（拍手）

理学療法学科
「いきいき幸齢教室―醍醐中山団地―」

日本は世界有数の長寿国ですが、急速な高齢者人口の増加に伴って要介護・要支援認定者数は増加傾向にあり、特に平均寿命と健康寿命（健康上の問題で日常生活が制限されることなく過ごせる期間）の開きが問題となっています。そこで、高齢者のQOL（生活の質）の向上・壮年期死亡の減少・健康寿命の延伸を目的に、2000年に「健康日本21」が施行されました。先行研究では、QOL向上のメリットとして転倒・要介護・要支援の予防が報告されています。また、QOLの高い人ほど地域集団活動に自主的に参加しているとされています。

そこで、私たちは、高齢者の外出のきっかけをつくり、楽しく体を動かすことで運動への意欲を高めることを目的に、醍醐中山団地で「いきいき幸齢教室」を開催しました。日程の調整、プログラム選定、必要備品の購入などはすべて学生が担当し、9月29日の当日はストレッチ、筋力トレーニング、脳トレを行いました。

認知症研究では、家族や子ども・友人・知人と関わりが深い人に比べて、そうでない人は認知症になる割合が2倍以上高いと報告されています。定期的に外出のきっかけをつくり、交流を深めれば認知症予防につながると考えられるので、いきいき幸齢教室は有意義だと思います。参加した高齢者の方々からも「楽しく体や頭を使うことができてよかった」「若者と触れ合えて楽しかった」「これからも続けてほしい」といった感想をいただきました。

理学療法学科の発表の様子

学生の学びとしては、高齢者の方々とコミュニケーションする際は大きな声ではっきりと話しかけることや目線の高さを合わせることなど、配慮の重要性を再認識することができました。また、高齢者の方々との会話を通じて、実生活での楽しみや困っていることの一端を知ることができました。

今回、特に注意したのはリスク管理です。たとえば高齢者の身体的特徴のひとつに「のどの乾きに気がつきにくい」ということがあるため、20分に1回は休憩を必ずとり、参加高齢者に水分補給を促しました。このようなリスク管理の方法は、ふだんの講義を通じて学んでおり、それを実際に活かすことができました。「いきいき幸齢教室」は、参加した学生にとって今後につながる貴重な経験となりました。（拍手）

日本語日本文学科書道コース
「筆を持てば天下一品」

書道コースでは、ふだんは口数が少なく内向的な学生も、筆を持つと人が変わったように個性的な字を書くことがあり、この発表のタイトル「筆を持てば天下一品」にはそのような意味をこめています。

書道コースの日常はあまり知られていないかもしれませんが、放課後になると教室の机を片づけ、床いっぱいに下敷きを敷き、みんなで書道展に向けた作品制作や授業の課題制作に取り組んでいます。

日常の風景がそうであるなら、非日常の学びの場は書道展です。本学書道コースが開く書道展は、夏の橘花展と12月の雪月花展で、準備はすべて書道部員と書道コースの学生が担います。部員は100人以上で、1人が1作品を出展し、個性あふれる作品がみごとに並びます。

今年の橘花展の来場者数は400人を超え、来場者からも「来年も来たい」「作品の数・種類が豊富でおもしろい」といった感想が寄せられて、部員は達成感を味わいました。学生が楽しみながら書展をつくりあげることで、会場がよい雰囲気になり、それが知名度や影響力の向上につながるのではないかと考えています。

雪月花展は、有志の活動で、100名以上の部員のうち40人が参加しました。40人の半数は1回生で、その参加理由は「新しいことに挑戦したい」など、熱意や意欲を強く感じさせます。

有志による書のパフォーマンスは、雪月花展だけでなく、学園祭や小学校や平安神宮等で年に数回披露しています。また、本格的な御朱印書き、賞状書き、お店の看板の題字書き等の依頼を受けて、お手伝いをしています。

書道コースは、日々の練習や合宿を通して、人の作品をみんなで鑑賞し、部員同士で刺激し合いながら練習に励みます。京都で開催されている書道展に足を運び、京都の学生の合同書展「響都展」や各大学での書展にも参加しています。

こうした日々の積み重ねにより、今年も全国高校大学書道展で優秀校に選ばれました。その実績があるからこそ、御朱印書き等の依頼があり、それに応えることで地域との信頼関係を育めているのではないかと思います。

また、学生が書展を運営するため、学外の公共の場で人と接することでマナーや責任感を身に付けられ、パフォーマンス等の有志活動を通して主体性を養うことがで

きます。このように書道コースは、意外にもアクティブに行動していますし、今後もさまざまな挑戦をしていきたいと思っています。（拍手）

救急救命学科
「地域の絆・消防団
―多世代（20代～60代）の心意気―
地域貢献と公的ボランティア」

私たちの学科は44名の学生が地域の消防団員として活動しています。消防史員が常勤の公務員であるのに対して、消防団員は「非常勤特別職地方公務員」という位置づけで、ふだんは別の本業を持ちながら、災害時には現場に駆けつけて、消防史員がスムーズに消火活動を進められるよう避難誘導や安否確認等を行い、平時には防災の啓発活動等も行います。

私たちが属する消防団は、月2回の無火災推進日に夜間の地域巡回をしていて、これは私たち学生消防団員にとって地域の分団の方々とコミュニケーションする大切な機会となっています。

消防団に入って最初に感じたのは、地域の方々の「自分たちの街は自分たちで守る」という、自主防災に対する熱い気持ちです。それを最も感じたのは今年6月の大阪北部地震と7月の西日本集中豪雨でした。団員は全員、本業の就業中でしたが、仕事の合間に器具庫に駆けつけ、小学生の登下校の見守りや地域の巡回等に積極的に取り組みました。

来年から消防史員として働く私たちは、その姿を見て、団員として見習わねばと思う一方で、あらためて「消防団はこれほどにも心強いものなのか。地域の自主防災のかなめは消防団ではないか」と強く認識しました。

学生消防団の意義については、ある団員に「阪神淡路大震災のときに明確になったのだ」と教えられました。阪神淡路大震災で高齢者に次いで死亡者が多かったのは私たち学生で、「その最大の原因は、日常的に地域の人たちとの関わりが薄く、共助ができなかったことにある。こうした悲惨な過去を二度と繰り返さないように、学生のときから消防団に入り、地域の人びとと知り合って、自助・共助を学んでほしい」と熱く語られました。

私たち自身も、きょうのこの発表をきっかけに、救急救命学科以外の人も消防団に関心を持ち、災害に強い大学、災害に強い地域になることを強く願っています。（拍手）

臨床検査学科
「臨床検査を支える京都発の世界技術」

私たちの学科は今年開設されたばかりで、「地域課題研究」も初めての取り組みです。この授業では、①企業での臨床検査技師の役割を知る、②企業訪問で一般社会の常識やコミュニケーション能力を身に付ける、③臨床検査技師が活躍する現場として、病院だけでなく企業も視野に入れて、自分の将来の参考にする、の3点を目的に、京都市内にある精密分析機器の製造企業を見学しました。

事前学習で訪問先企業について調べ、質問事項も検討した上で、臨床検査技師が実際に使用する液体クロマトグラフィーや乳がん検査機器等を開発している島津製作所、世界初の血球数とCRP（反応性たんぱく。炎症マーカーの一種）を同時計測できる機器やpHメーター等を開発している堀場製作所、グリコヘモグロビン自動分析装置や血糖自己測定器を開発しているアークレイ株式会社の3社を訪問しました。

その結果、3社に共通する点を発見しました。それは「グローバル展開」です。3社とも海外に多くの拠点があり、災害時や海外の医療現場で3つの企業の機器が活躍しています。

見学を終えた後、この取り組みで発見したことや考えたことを、班内で共有し、発表しました。その結果、臨床検査学科初の「地域課題研究」の取り組みは、企業で働く臨床検査技師像や最新の検査機器について理解が深まっただけでなく、自分の進路について考える機会にもなったことがわかりました。さらに、臨床検査技師をめざす意欲が高まり、臨床検査技師としての社会貢献を病院勤務という枠にとらわれずに考えられるようになりました。

今後の大学生活においても、みずから深く学び、幅広い知識を修得して、地域に貢献できる臨床検査技師をめざしたいと思います。（拍手）

学長賞を受賞した心理学科の林栄里香さん

■表彰結果
□学長賞（1チーム）
◎心理学科「『しゅくだいかたづけ隊』参上！活動報告」
□副学長賞（2チーム）
◎都市環境デザイン学科「洛和会×こだわり市場」
◎救急救命学科「地域の絆・消防団－多世代（20代～60代）の心意気－地域貢献と公的ボランティア」
□プレゼンテーション賞（1チーム）
◎臨床検査学科「臨床検査を支える京都発の世界技術」

（了）

大学の地域連携事業から得た学びの蓄積

2018年10月、地域連携センターは、大学の社会的な役割についての検討を目的に毎年開催する橘セッションの一環として、「学まち AWARD」というイベントを初めて開催した。京都橘大学は、これまで学生と教員が、授業内外で地域の様々な活動に取り組んでおり、それらの成果が2日にわたって、合計12学科の学生から発表された。この発表会の目的は、地域連携の実践で得た学びを学生の中で整理することと、地域と大学による連携をさらに深めるために学内関係者間で情報共有し蓄積することである。発表内容は、今回の発表会で最も注目を集めた子どもの学習支援に関するものをはじめとして、文化財防災、地域福祉、地域振興など多岐にわたるものであった。

この発表会で印象的だったことは、参加する学生が生き生きと自信をもって発表する姿である。大学教育が社会との関係の中で完結することを、実感する機会となった。学生に対する教育の場が実践を通じて得られることは、今後も大学が地域と連携する大きな誘因になるだろう。そして、今回の発表会を通じて改めて考えさせられたのは、地域と大学との連携によって成果が期待できるプログラムの特徴である。その特徴とは、問題の解決策が政府と市場によって十分に提供されていないもので、地域という集合性を活かして提供されるということである。このようなプログラムは、問題解決に向けた社会実験やきっかけづくりを可能にするのである。

学生や教員が地域で実践活動をする際に懸念されることは、プログラムが学生の卒業と共に立ち消えになることや、経験則が教員個人に留まって課題解決のために必要となる情報が共有されないことである。今回の「学まち AWARD」を通じて、これらの懸念を払拭するような今後につながる手応えと、学びの蓄積方法に関する課題が見えてきた。まず、今回の発表会を緩やかなコンテスト方式によって開催したことには、発表者のよりよいプレゼンテーションを奨励する効果があったと思われる。また、聴衆に審査員としての役割を担ってもらったことには、発表内容に関心を持ってもらうという一定の効果があったといえる。しかし、今後の活動に向けた意見交換を十分にすることができなかったことは、主催者側の心残りとなった。本来であれば、短時間の発表では知ることが困難な事柄について、学生や教員間で意見を交換する機会があることが望ましい。今回は時間の都合から見送ったポスターセッションなどの方法も含め、次回の検討課題としたい。学んだことを地域での新たな実践のために蓄積する方法については、今後も思案する必要がある。そして、その過程は、刺激的で楽しいものになるだろう。「学まち AWARD」で感じられた参加者の実践に対する熱気が、そう予感させるのである。

（山岸達矢）

つながる Vol. 14（2019年3月31日）
発行：京都橘大学　地域連携センター
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34
Telephone: 075-574-4342　Facsimile: 075-574-4149
http://www.tachibana-u.ac.jp　E-mail: occ@tachibana-u.ac.jp

京都橘大学
地域連携センター
Center for Regional Collaboration
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY